



「責任という名のバトン

く過去を力に、未来を拓く二十歳の決意く」

二十歳という人生の節目は、祝福と同時に「責任」という重いバトンを受け取る瞬間でもありません。私は今、これまでの歩みを振り返り、そのバトンをどのように未来へ繋ぐのか、私の決意を述べさせていただきます。

私が高校時代に始めた地域の清掃活動、グリーンバード。最初は友人との好奇心でしたが、活動が徳島チームの運営へと発展する中で、「社会との関わり方」への意識が根本から変わりました。お盆の阿波踊り期間中、ゴミで溢れる街を前に、私は「阿波踊りエコアクション」を継続しました。この経験を通して、私は、社会の一員として、自ら環境を整え、責任を負う大切さを学びました。これは、単にゴミを拾う活動ではありません。子どもたちに最も近い場所で環境づくりを行う小

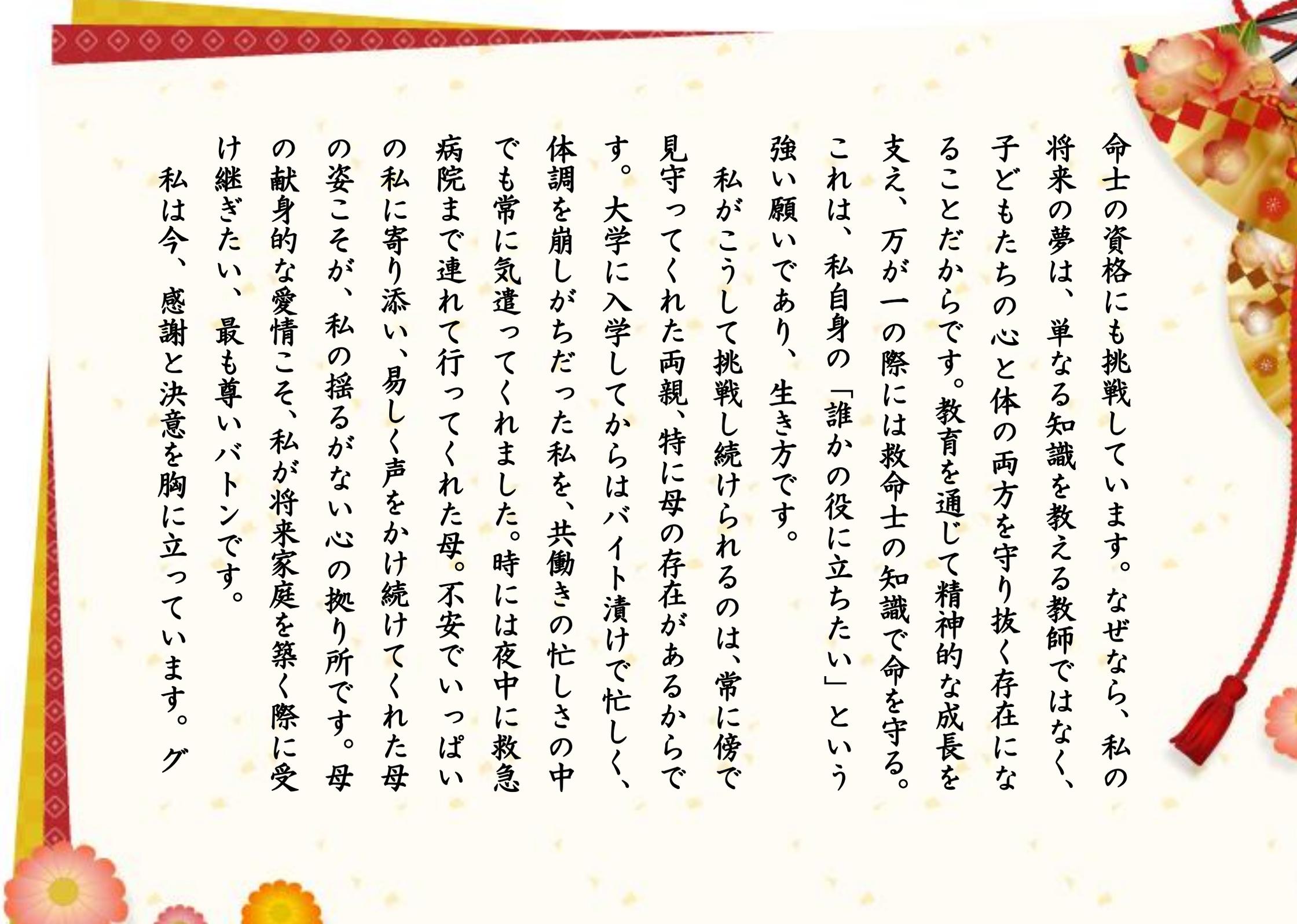


学校教員という私の将来の夢にとって、最も大きな基盤を築く行為であると確信しています。

そして、この秋、私は最も大きな壁を越えました。それは、車いすハンドボールの全国大会出場です。車いすもハンドボールも未経験。規定により試合参加が決定し、不安と緊張で体が震える中、慣れない車いすでコートに立ちました。結果は全敗。しかし、その敗北は、私にとって最高の勝利でした。この挑戦は、「やってみることに価値がある」という生き方そのものを私に教えてくれたからです。パラスポーツの仲間との出会い、多様性を力に変えるコミュニティに触れたことで、未経験や困難を恐れる心こそが、自分自身の可能性を最も限定するものだと言感しました。

現在、私が目指しているのは、「多角的な貢献者」としての生き方です。大学では、小学校教員、中学校・高等学校の体育と英語の教員資格の取得に加え、人の命を助ける医学への興味から救急救

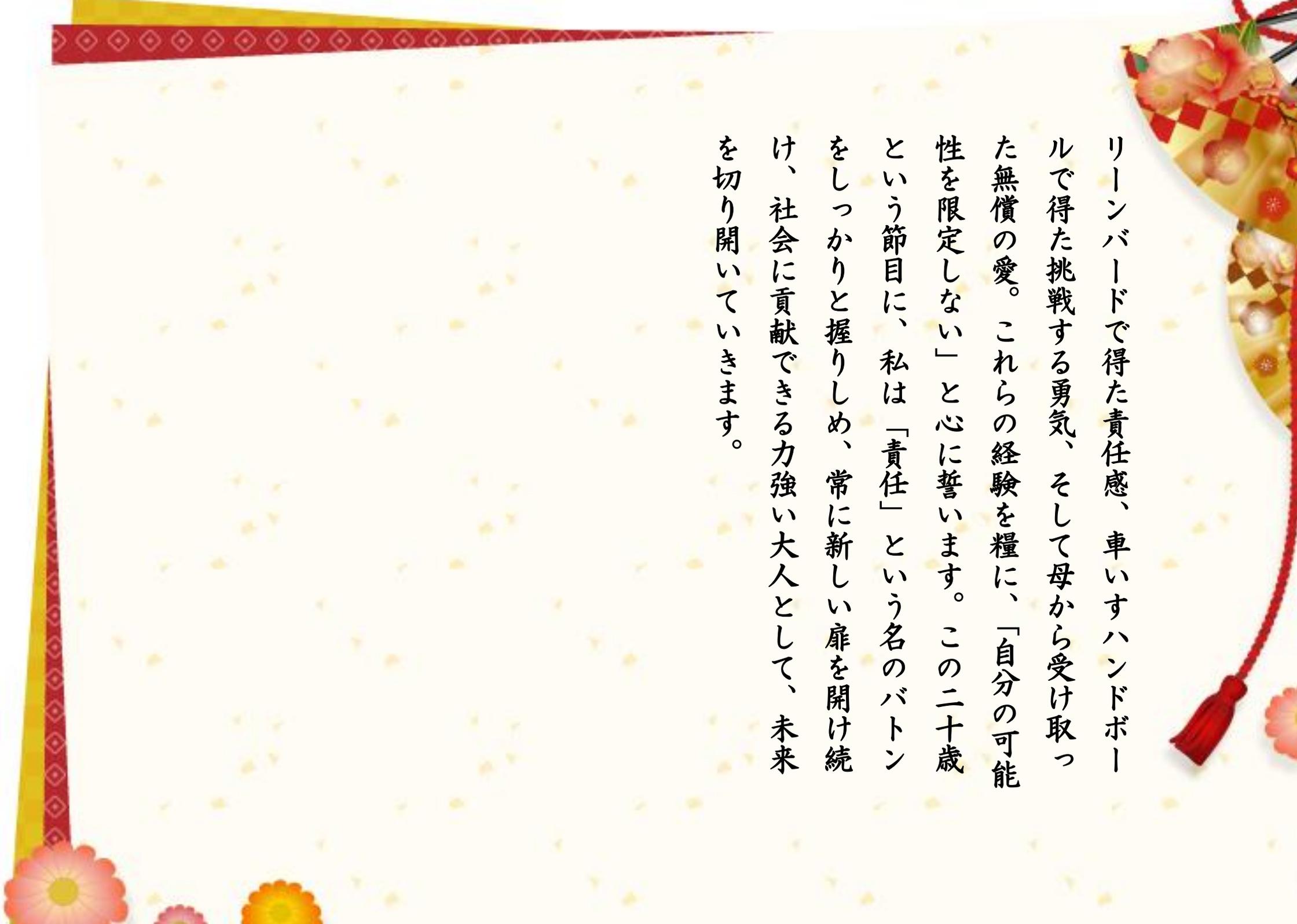




命士の資格にも挑戦しています。なぜなら、私の将来の夢は、単なる知識を教える教師ではなく、子どもたちの心と体の両方を守り抜く存在になることだからです。教育を通じて精神的な成長を支え、万が一の際には救命士の知識で命を守る。これは、私自身の「誰かの役に立ちたい」という強い願いであり、生き方です。

私がこうして挑戦し続けられるのは、常に傍で見守ってくれた両親、特に母の存在があるからです。大学に入学してからはバイト漬けで忙しく、体調を崩しがちだった私を、共働きの忙しさの中でも常に気遣ってくれました。時には夜中に救急病院まで連れて行ってくれた母。不安でいっぱいなのに寄り添い、易しく声をかけ続けてくれた母の姿こそが、私の揺るがない心の拠り所です。母の献身的な愛情こそ、私が将来家庭を築く際に受け継ぎたい、最も尊いバトンです。

私は今、感謝と決意を胸に立っています。グ



リーンバードで得た責任感、車いすハンドボールで得た挑戦する勇氣、そして母から受け取った無償の愛。これらの経験を糧に、「自分の可能性を限定しない」と心に誓います。この二十歳という節目に、私は「責任」という名のバトンをしっかりと握りしめ、常に新しい扉を開け続け、社会に貢献できる力強い大人として、未来を切り開いていきます。